
Unnamed child ―― 天の車 ――

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unnamed child — 天の車 —

【Nコード】

N0402X

【作者名】

sakura

【あらすじ】

全米を震撼させたケース・アングリーボマーと呼ばれる事件があった。その事件を引き起こしたのは「マジックボム」と呼ばれる少女姿の殺人鬼。ケース・アングリーボマーと呼ばれる過去の事件は現在へとつながり、そうして犯罪者たちによって構築される裏社会へと多くの人間たちをいざなっていくのだった。マジックボムを取り巻く、警察関係者や犯罪者たちは、やがて、巨悪の存在を目の当たりにしていくことになるのだった。「Unnamed child — Magic Bomb —」の大幅な改訂版となりま

す。

序章

高層ビルの窓辺に少女がいた。

少女の、姿は驚くほど幼い。

地上十三階にあるその部屋の窓は、頑丈なはずのガラスはあっけなく破れ、高層階ならではの強風を室内に招き入れる空洞と化している。

金色の長い巻き毛をたなびかせて、銃を構える捜査官たちを見据える。

暗がりの中に輝く水色の瞳はまるで悪魔の持ち物であるかのようにも見えた。

「しつこいわね」

短くつぶやいた少女に三十代の男性捜査官が、拳銃を構えた照門の向こうで片目を細めた。

「君が逃げなければいいだけのことだ」

ドスを利かせた声で男に言われて、少女はひらりと肩の上で片手を振る。

そんな彼女の一举一動に、銃を構えているはずの男たちが動揺していた。しかし、銃口を向けられているはずの金髪の少女はそんな男たちに動じることもなく視線を滑らせる。

口元に拳をあてて、少女はころころと笑った。

「しつこい男は嫌われるわよ？」

「別に、俺たちは君に嫌われても一向に構わないから問題ないな」
低く告げられて少女は目を上げる。

「ふうん」

外見だけならば、ハツとするような美少女だ。

白い肌の、金色の巻き毛。水色の瞳はまるで湖面を思わせる静寂をたたえており、長いまつげは二重の目を彩っている。

その頬はバラ色で、その辺の美少女コンテストに参加している子

供たちとは一線画していた。

着ている服がその辺から奪ったのだろう大人物のシャツなどなければ、誰もが見とれてしまうほどの美少女であることに間違いはない。

「……つまらない男ね」

肩をすくめた彼女は、まるで相手を小馬鹿にするような表情を浮かべてから、ちらと相手の男たちを見やった。そんな彼女の目線一つにすら緊張が走る。

彼女はそれすらも楽しんでるように感じられた。

事実、彼女はそんな大人たちの反応を楽しんでいたのかもしれない。

つまり、と言いながら彼女は手を伸ばした。

無造作に少女の隣に立ち尽くしていた四十代の女の胸ぐらを引き寄せた。

そう。彼女は人質にされていた女だ。

アメリカ合衆国が時には非情な決断を下すことを捜査官の男たちは知っているが、現実として目の前に恐怖に震えている人質の女性を前にすると良心が痛んだ。

なによりも、危険に晒されているのは人質だけではない。

捜査官たち全員が、目の前の少女と対峙していることによって自分の命を危険に晒しているのである。

多くの犠牲を払いながら、アメリカ連邦捜査局は目の前の少女をやっと数フィートの距離にまで追いつめた。

もしかしたら、次は自分が死ぬ番になるのかもしれない。そんなろくでもない可能性すら、頭の片隅をよぎる。捜査員たちは、すでに自分の命を犠牲にする覚悟などつくにできていたのだ。

「あんまり近づく、こいつを殺すわよ」

型どおりの脅し文句をつぶやいた少女が小さく口元を歪める。

その邪悪さは、いったいなんだろう。

白い肌の、金色の巻き毛の、かわいらしい姿をした悪魔は、月明

かりに照らされてそこに立っていた。

その場にいる誰もが、これからなにが始まるうとしているのか知りはない。

「……どうして、こんなことを」

交渉役でもある三十代の捜査官が固い声音のままに問いかける。

「どうして……？」

少女は、まるでそんなことを聞かれること事態が意外だったとも言いたげな表情で小首を傾げて見せた。

「どうしてって、つまりそれはどういうこと？」

「君は誰よりも賢明で、判断力も持っているはずだ」

見かけ通りの子供ではないのならば。

そう言外に告げられて、金色の巻き毛の少女は不愉快そうに眉をひそめた。

「だというのに、どうしてこんな破壊衝動につき動かされるようなことを繰り返すんだ」

静かに、説得するような男の言葉が、少女の勘に障った。

知識人が犯罪を犯さないわけではないことを、男は知っている。

しかし、時にはこうして相手を説得することもあった。

犯罪者の感情を揺さぶるために、捜査員たちは慎重に言葉を選ぶ、「君がなにに対して不満があるのか、我々にはわからない。だから、話を聞いてやるからその人を離してくれないだろうか？」

当たり前だ。

目の前の小さな少女がなにに対して不満を抱いているのか、捜査官たちにはわからない。

どうしてこんなにも幼い子供が犯罪に手を染めなければならないのか。

「あんたたちなんかに理解してもらいたいなんて思っていないから心配いらないわ」

言いながら少女はにっこりと笑った。

その笑顔はあまりにも艶やかで、瞳を奪われる。

彼女が微笑を浮かべた瞬間に、バリと空気がはぜた音が響いて、再び緊張した空気が室内を駆け抜けた。

「こ、殺さないで……」

まるで泣くような声が、人質の女の唇から漏れる。

おびえきったその声に少女が金色の眉毛をつり上げたのが見えた。

「お黙り」

ぴしゃりと女の言葉を封じるように言い放つ。

幼い外見に、成熟した精神、そして天才じみた判断力と知識。

それらは金色の巻き毛の少女を構成するものであったが、ひとつの個体の中に存在するにはあまりにもアンバランスでどこか異様なものを感じさせてならない。

黙れと告げられて、女は次の言葉を発することもできないまま硬直してしまった。

おそらく、彼女は誰かしらの殺害現場を目撃してしまったのだろう、と捜査官は考えた。そうでなければその怯えようは考えられなかった。

普通の人間であれば、金色の巻き毛の少女をみただけではそのまま連続殺人犯という本性をみきわめることは難しいだろう。

実際のところ、ほとんどの捜査官たちも「そう」だ。

自分の目の前で、非常識な殺害現場が再現されなければ誰も目の前の幼い子供が殺人犯であるとは考えなかった。

「何人殺せば、気が済むんだ……」

苦々しげな男の声に、少女はふわりと笑う。

天使のほほえみ。

そうたとえても良かったかもしれない。

「……どうせ」

歌うように彼女が告げる。

「どうせ、あんたたちにはわからないわ」

そう言った瞬間、火柱があがった。

少女の横に、青い炎の柱があがる。

「ブリース、だっけ？」

炎の光が、少女の横顔を照らし出す。まるで作りものめいた彼女の横顔に、捜査員たちはぎょっとした表情のままで目の前の悪魔にも似た子供を見つめた。

サタンの生まれ変わりがいたならば、こんな姿をしているのではないかとすら思わせる。

突然名前を呼ばれて三十代の男の捜査官は少女を凝視した。

「どうして俺の名前を……」

「秘密」

訝しげな眼差しの男、ヴィリアム・ブリースに少女はいたずらっぽく笑う。

右手の人差し指で自分の唇を辿った彼女は、青い光に照らされている。

悲鳴も上げることなく、生きたまま炎に包まれた人質の女は、おそらくあつと言う間に絶命したのだろう。立ち尽くしたままの姿でこうこうと青い炎に包まれている様はまるで松明そのものだ。

それこそが、彼女の恐ろしさだ。

正体不明の殺人鬼。

「……あ」

呆然と炎を見つめていた捜査官の誰かがうめくように声を漏らす。また、ひとり死んでしまった。

そんな無力感。

どうしたらいいのかもわからない。

まるで無敵の魔法使いにでも対峙している気分になる。銃など構えていても、とても勝てる気がしない。

魔法と、銃のどちらが強いかと尋ねられれば、答えは言わずもがなである。

どんな仕掛けがあるのかはわからない。

しかし、目の前の小さな子供が意識を「そちら」に傾けるだけで、彼女の意志によって炎が灯る。そしてその強さを自在に操る様は、

まるで炎をつかさどる神のようだ。

そんな者を「普通の人間」が武器を片手にして勝てるのか……？
言葉が見つからずに黙り込んだブリースに、少女もなにも言わない。

「……どうして、殺したんだ」

彼女を。

なにもしていないじゃないかと、咎めるブリースに金色の巻き毛の少女は身じろいだ。肩にかかる長い髪を軽く払った。

「わたしの、ターゲットだからに、決まってるでしょ」

まるで嘲弄するように少女が笑みを浮かべる。

「どうして、君は殺すんだ……」

うめくように、同じ言葉を繰り返す。

どうして殺さなければならぬのか。

どうして死ななければならぬのか。

「……どうして」

拳銃を構えたまま問いかけるブリースの声はかすれていた。

もうすでに何人の人間が死んだのかわからない。

目の前で救えなかった命をいくつ数えただろうか。彼女を逮捕するための方法も思いつかず、ただ時間を待つように相対するしかない。

無作為につっこんだところで、捕らえるどころか自分が火柱に包まれることは目に見えている。だから、安易につっこめない。

「ちょっと、どいてくださる？」

ふと人混みをかき分けるようにして若い女の声が聞こえた。

十代半ばほどだろうか。

頭髮はやはり金色で、瞳は灰色だ。

当たり前だが、ブリースの知らない女性だ。

ブリースに「こんばんは」と言ってから、窓際に立つ少女に笑顔を向ける。

自分よりもずっと年上にも見える灰色の瞳の少女にしか見えない

女を見つめて、金色の巻き毛の少女は言葉を失ったようだ。

嫌悪感に瞳がゆがんだ。

水色の瞳に憎々しげな色が宿る。

「君は……？」

「ペンタゴンから人がくると、ブリース捜査官は聞いていらっしやいませんか？」

静かに灰色の瞳の少女が言う。

体に合わせて作られた制服はおそらく特注品だろう。

「……では、君が？」

「わたしはマリア・スミス、階級は少佐になります」

そう言いながらも彼女は、視線を少女に固定したままだ。

こんなにも若く見える女性の階級が少佐であるということに驚きを隠せない。

「これは、失礼しました。少佐殿」

「やめてください、階級は一応もらっているだけです。正体はただの軍の狒犬ですから」

マリア・スミスは自分よりもずっと背の高い男を見上げて微笑してみせた。

「それよりも、今は目の前の彼女のことです」

背中に届くだろう長い髪を無造作に束ねているマリアは一步踏み出した。

膠着状態に陥った状況を打破するために、国防総省が派遣した陸軍特殊部隊の戦闘員。

確か、そんな情報が捜査員たちに伝えられたのは半日ほど前のことだった。

なるべく早く合流する、ということしか捜査官たちは聞いていなかったため、自力で殺人鬼の少女を追いつめたのだが、追いつめたからと言ってその先をどうにかできるなどとは考えていなかった。

「取引を、しませんか……？」

マリアが静かに語りかける。

「取引、ですって？」

「そうよ、取引。あなたはとても頭の回転が速いから、言葉の意味くらいは理解しているでしょう？」

感情の起伏が感じにくいマリア言葉を、巻き毛の少女が聞いていた。

そもそも、今日の前にいる子供に対して「少女」という言葉が適當なのかすらわからない。

少女と呼ぶには幼すぎる外見の、そんな子供。

「悪いようにはしないわ」

マリアは言う。

まただ、とブリースは思った。「また」型どおりの言葉。

目の前にある現実の内側、そのどこかになにかとてつもない真実が隠されているかのような。そんな言葉。

「あなたの言う悪いようにしないって、どういうことよ？」

棘の含まれた少女の声に、マリアは柔らかく笑う。どこからどう見ても軍人であるようには見えない。

「言葉通りの意味よ」

あなたは愚か者ではないでしょう？

告げる彼女に、少女がフンと鼻を鳴らす。

「悪いけど、まだやりたいことがあるのよ」

「つまり、交渉決裂ってことになるのかしら？」

「そーいうことねっ！」

言い放つと、彼女は絨毯の敷かれた床を身軽に蹴りつけた。

音もなく、彼女の体が宙を舞う。そこは、地上十三階だ。

強い風が吹き付ける窓枠に立った彼女はまるでいたずらでもするかのような表情を浮かべると小首をかしげた。

「バイバイ」

ひらひらと顔の横で右手を振った。

彼女は言っているのだ。「まだ、追ってこい」と。

「あんたが、そっちにいるってことはわたしの手の内はお見通しっ

てことなんだろうからさ」

彼女が言い終わるか、言い終わらないかというところで、突然爆風と同時に視界が赤く染まった。

それは血液の赤ではない。熱のこもった、強い風圧。

衝撃波だ。

顔を両手でかばいながら思わず目をつむった彼は、衝撃波が通り過ぎてから、そろりと目を開くと、陸軍の士官の女は大きく目を見開いたままで熱風の中に立ち尽くしていた。

真っ赤な光が彼女の横顔を照らしている。

目の前の殺人鬼の少女が何者なのか。そして、自分の隣にいる軍服の女が何者なのか。

爆炎と強風の中に窓枠に片足をかけている少女を見つめる軍服の女の表情の中には焦りなど見られなかった。

ただ、事態を冷静に見守っているようにも感じられる。

決して焦ってなどいない。

少女は窓の外へと身を躍らせる。

勝算があるからこそ、彼女は飛び降りたのだ。そんなことは、そこにいる捜査官たちとマリアにはわかっていた。

少女姿の、金色の巻き毛の殺人鬼。彼女がそんなことで死ぬわけがない。

彼女は死なない。

「逃がしちゃったわね」

窓の外に消えた殺人鬼の姿に、マリアは肩をすくめた。見下ろすと地上で派手な爆発が見える。なにをしているかは明白だった。彼女が退路を確保するために、爆発を起こしているのだ。

「……あなたがくれば、彼女を逮捕できるかと思っていたんだが」
ため息混じりに銃をホルスターに戻しながらヴィリアム・ブリスが言えば、マリア・スミスは帽子を頭から外しながら息を吐き出した。

「わたしは、彼女の火を封じ込められるわけではないから、そんな

ことをわたしに期待しても無理よ」

マリアが苦笑する。

「しかしあなたは、マジックボムを捕らえるための秘密兵器だと聞いているぞ？」

「……そうね、そうかもしれないけど。わたし”たち”は、彼女の前型だもの。どうすることもできないわ」

そう言うと、マリアは踵を返す。

人差し指と中指で挟んだ名刺をブリースに手渡してから、彼女は律動的に歩き去った。

白い名刺には素っ気なく所属と、電話番号、そして名前が書かれていた。

不可思議なのは彼女の所属だ。

「心理作戦部隊、第〇〇〇チーム所属？」

〇が三つ並んでいるということは、要するに存在しないということなのではないだろうか？ そんなことをブリースは思う。

そもそも心理作戦部隊というのは陸軍特殊作戦軍団に所属する部隊で、そのほとんどを予備役で構成されている部隊である。かの有名なグリーン・ベレーや第七五レンジャー連隊などもここに所属している。

その中でも心理戦などに長けるのが彼女の所属しているだろう「心理作戦部隊」なのであるが、その中に〇〇〇チームなどという部署があるなどと聞いたこともない。

「……マジックボムってやつはいったいなんなんだ」

陸軍の特殊部隊が動くと言うことは、なまなかではないということだ。マジックボムを追いかけながら、一向にそれらの事件の真相が見えてこない。

彼女は全米を転々としながら人を殺して回る。

そのターゲットになる人物はほとんどが高名な研究所の研究員であったり、会社の役員であったり、また、政治家であったりする。どんな基準で彼女が殺しているのかも不明なため、彼女は無差別殺

人を犯す連続爆弾魔であるというのが世間一般の常識だった。

手の中の名刺をスーツの胸ポケットにしまいこみながら、ブリースは捜査官たちに撤収の指示を出した。

どちらにしたところで、目の前の殺人鬼が逃げてしまった以上は、そこにいてもなにかをどうすることもできないのである。

大きなため息をついたヴィリアム・ブリースは、金色の短い髪をかき回した。

その事件が、後に「ケース・アングリーボマー」として語り継がれるようになるとは、ヴィリアム・ブリースは知るよしもない。

ケース・アングリーボマーによって、人々は隠された禁忌の存在を知る事となり、そうして全ての元凶になるのだということを、世界の人々はまだ知らなかった……。

ケース・アングリーボマーこそが、全ての始まりなのだということを。

第一章 カルメン 1

陸軍特殊作戦軍団、心理作戦部隊第〇〇〇チーム。

そこに在籍している隊員はただひとり。名前をマリア・スミス。

しかし、彼女の正体は不明。一説によれば、五十年ほど前から第〇〇〇チームは存在していると言われていたが、当のチームに在籍している隊員は常にたったひとりとされた。

「……以前、事故がありましたな」

長身の黒人男性に話しかけられて、マリア・スミスは小さく首を傾げた。

「事故、ですか？」

コーヒーの入ったマグカップを手渡されて、マリアは灰色の瞳で曖昧に笑う。

「ええ、病院を狙ったテロ事件でした」

物憂げな男の言葉に、ゆるやかにうねるハニーブロンドを背中に流して彼女はかすかに目を細めた。そうして男の言葉の先を待つ。

彼はマイケル・ウィンストン。

アメリカ合衆国でも精神科の権威としてFBIに捜査協力をしている。

そんな彼の黒い瞳を見つめたマリアは襟元に指先で触れた。

「……大変な事件でした。多くの優秀な医師や看護師たち。スタッフの命が奪われたのです」

大きな人的損失だった。

淡々と話を続ける彼の話の邪魔をせずにマリアは無言で頷くばかりだ。

本来であればそこは相づちを打つべきだったのかも知れない。

「そのとき、捜査に訪れたFBIと共にきた女性がいたのですが、その人もマリア・スミスと名乗っていました」

「そうですか……」

彼の言葉を最後まで聞いて、マリアは彼の言葉の意図を悟った。
マイケル・ウィンストンは彼女に言っているのだ。

彼が、以前出会ったマリア・スミスとは何者なのか、と。

「もう、予想できていると思いますけれど、マリア・スミスというのは、第〇〇〇チームに在籍する隊員の偽名です」

マリアの説明に、ウィンストンは神経質に目を細めた。

その瞳は、まるで鋭利な刃物のようで、そんな彼の様子にマリアはマグカップに唇を寄せる。

「マリア・スミスとは、何者なんですか？」

「目の前にいるじゃありませんの」

ふわりとほえんだマリアは、金色の睫毛をじっと伏せた。

「ごめんなさいね、わたし、わたしの前のマリアのこと知らないの」
くすりと彼女はほほえむ。

自分の前のマリア。

彼女の言葉の意味がわからない。

「わたしが知っているのは、わたしの前のマリアは四人いたというだけ。それ以前のマリアから引き継ぎをされたわけでもないし、以前のマリアがどうなったのかも、わたしは知らない。もしかしたら、わたしの次のマリアも、わたしのことを知らない、ということになるんだと思いますけれど……」

とつとつと話すマリアは、コーヒークップの黒い水面を見つめている。

その瞳がなにを考えているのか、ウィンストンにはわからない。

「知りたい、とは思わないのか？」

「……別に、わたしは知りたいとは思わないわ」

ほほえみながら首を傾げた彼女は、落ちかかる髪を指先でかき上げた。

「知りたいと思うのは人の欲求。わたしは、あなたたちと同じ人ではないから、あなたたちのように知りたいとは思わない」
たったそれだけのこと。

彼女はそう言って微笑する。

なにを考えているのかわからない。

「ドクター、あなたはわたしのことなんて理解しなくてもいいんです」

理解などできなくても、「マリア・スミス」はアメリカ合衆国の味方なのだから。

歌うように彼女は言った。

「わたしの前のマリアは四人。けれど、それまでのマリアはとても短命だったから、わたしがマリア・スミスという名前を名乗るようになってから、もう随分たつわ……」

「マリアの任務というのはなんなんだ……？」

「……それは」

クスリと金髪の彼女はほほえんだ。

「わたし”たち”の任務はあなたたちが決めることよ」

外見には似合わない、老成した落ち着きを感じさせるマリアは半分ほどになったカップをデスクに置いてから手元のファイルを指先で触れた。

「今回はFBIの依頼です」

「……そうだったな」

まるでたった今思い出した、とでも言いたげなウィンストンの台詞に、マリアが笑った。

「我々が、メサイアの出動を依頼したんだったな」

メサイア。

それは第〇〇〇チームのコードネームだ。

メサイア、と呼ばれる理由が、マイケル・ウィンストンにはなんとなくわかったような気がする。

「在籍しているのが、マリアだから、部隊のコードネームがメサイアというのだな」

納得したように顎に自分の指先で触れながら頷けば、マリアは静かに笑う。

「準備ができたようだ」

慌ただしくオフィスに入ってきた青年に、ウィンストンが座っていたデスクから立ち上がった。

「そのようですね」

厳しい瞳に戻ったマリアは、ウィンストンに続いて立ち上がる。

通された取調室には二十代半ばほどの青年がいた。

「……彼は？」

「先日、D C P Dで駐禁で拘留した男なんだが、どうも怪しくてな」
「……………」

後ろ手に手錠をはめられて、猿ぐつわをかまされている。そして椅子にくくりつけるように縛られている様子はまるでどこかの捕虜のようだ。

片目を細めたマリアはガラス越しに男を見つめる。

「怪しい、というのはどういうことですか？」

たかがその程度で捕まえた男の捜査に対して、国防総省のメサイアに捜査依頼をするとは考えられない。

「言葉のままの意味だ。そうでなければ、わざわざ駐禁程度でメサイアの出勤など依頼しない」

「そうですか……」

取調室に続く扉のドアノブに手をかけた、黒人の男にマリアは無言のままで後に続く。

中に入ると、男は少しばかり驚いた様子でふたりを見つめた。

確かに、奇妙なふたりと言えはそうなのだろう。

スーツ姿の黒人の大男と、陸軍の制服を身につけた少女。

少女とも言えるが、彼女が「少女」ではないことを知っているのは、室内にいるのはウィンストンとマリアだけで、目の前で束縛されている男はなにも知らない。

だから、彼は驚いていた。

なぜ自分の前に、陸軍の制服を着た少女などがいるのかと。そう思った。

「……う？」

猿ぐつわをかまされたせいで言葉など出ない。青年はじっと彼女を見つめている。

「ドクターは、その辺にいてください」

ああ、と言った彼は、折りたたみ式の椅子を引き寄せて、そこに浅く腰掛けた。これから、なにがはじまるのかとか、そんなことはマイケル・ウィンストンにはわからない。

これから、彼女がなにをするのか。

コードネーム、マリア。

そう呼ばれる彼女の所以。

ウィンストンの視線の先で、マリアは目を閉じた。

ぐしゃりと空間が歪んだ。まるで上から思い切り押しつけられるような、そんな圧迫感を感じたような気がして、ウィンストンは眉間を寄せる。

なにが起こったのか理解できない。

時間にしてどれだけだっただろう。

「もういいです」

マリアが告げた。

「もういいのか？」

「充分です」

ウィンストンが時計を見れば、彼女が取調室に入ってからまだ十分もたっていない。

たったそれだけの時間でマリアはなにをしたのだろうか。

捜査の手法を根本的に覆す「マリア」に隠されたものとは何なのだろうか。そんなことを考えていると、彼女はくると踵を返した。オフィスに戻ってからの彼女は端的に言うところだった。

「彼は、最近、どうも過激な連中に目をつけられたようですね。うまい口車に乗せられて、はいはいついていったら、軽いマインドコントロール下に置かれていたようです。行動のトリガーになるのは、金髪の少女を見ること、だったようですが、たまたまそれが発覚す

る前にDCPDによってご用になった、と」

そして、言動がやや支離滅裂だったために、マイケル・ウィンストンまで報告が上がり、今回、彼を通じてマリア・スミスが出動するという事態にまで発展したのだった。

「金髪の少女、ですか……」

しかし、金髪の少女など山ほどいる。

「もしも、洗脳が作動していたらどうなったんだ？」

問いかける彼の声がかすかにかすれた。

「そこまではわからないわ。ただ、彼らは闇雲になにかを探していた」

なにを欲しているのかはわからない。

「君は、我々を裏切ったりはしないんだな……？」

「心配しなくてもいいわ、わたしはそうデザインされていますから」
そう言って彼女は笑った。

＊

不愉快だと、「彼女」は思った。

「彼女」がそう感じている。

「……あの子の、思いはとてもダイレクトに伝わってくるわね」

マリアは苦笑する。

「とても純粹で、とてもまっすぐ……」

わたしたちとは、違う存在。

そっと笑って、マリアは青い空を見上げた。

流れ込んでくる意識の大群を、まるで押しのけるようにして「声」が聞こえる。

あなたの名前は誰かしら……？

灰色の瞳を細めた彼女はそうして流れ込んでくる声に耳を傾けた。

「わたしの邪魔をしないで……！」
ばかり、と空気が爆ぜた。

あまりにもリアルな声に、マリアは意識を引き戻す。

そう。「彼女」に深入りするのは危険だ。

「あなたはなにを望んでいるの？」

「わたしは、なにも望んでいない」

「嘘つきね」

マリアは聞こえてくる声にそっと笑った。

嘘ばかり。

「あなたが望んでいることは、わたしたちも同じように望んでいること。わからないはずはない」

誰もいない空間を見つめて、彼女はそっと笑うばかりだった。

まるで、止まることを知らない時間のように、時代が動き出す…

…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402x/>

Unnamed child ―― 天の車 ――

2011年9月26日22時39分発行